

## 報告 11 設楽ダム環境影響評価（養殖）ネコギギ放流という危険な賭け

新村 安雄（リバーリバイバル研究所）

設楽ダムは “初めてづくし” のダムである。

- 環境アセスメント法の対象として
- 「放流ガイドライン」を事前に適応した放流実験！
- 正常流量の確保を目的として

COP 10 を開催するホスト COP 10 を開催するホストという視点  
生物多様性の維持というテーマから検証する。

- 1 環境影響評価としての妥当性  
ダムによる影響は正当に評価されているか？

### ■・直接的影響

58ヶ所の生息淵のうち

18 淵が改変（消失） 34.0%

上流の 1 淵が孤立 1.9%

約 36% の影響というのは小さいか？

生息域の消失と個体群の消失は 同じ意味だろうか？

生息地の保護を理由に分布、生息密度（個体数）は公表されていない。しかし  
具体的な生息場所を示さず、ダムによるリスクを表すことは可能だ。

例）PVA（個体群絶滅可能性分析）

個体群サイズとその個体群の絶滅可能性についての分析は 「設楽ダム魚類検討委員会」では行われている。

### ■・間接的影響

下流域の生息域の 変化は小さい 下流に影響を与えないダムは存在するか？

【芹沢部会長】「これだけ綿密な調査をし、この結果をもとに予測すれば、ネコギギについては豊川本流のダムより下流では影響があると予測されるのではないか。」

愛知県環境影響評価審査会設楽ダム自然系部会会議録 平成 18 年 11 月 1 日

我が国初の環境影響評価の対象となった大規模開発「ダム建設」  
しかし、  
環境影響評価は正当に行われているとはいえない！

- 2 対策としての「移植（移動放流）」の問題点。  
「移植」で生物多様性は守られるか？

## 2-1 放流ガイドラインとは

検索で「魚類学会」「自然保護委員会」「ガイドライン」

放流に関わる生物多様性に対する問題点 以下 抜粋

「生息に適さない環境に放流した場合には、放流個体が短期間のうちに死滅するだけに終わる。在来集団・他種・群集に生態学的負荷（捕食、競合、病気・寄生虫の伝染など）を与える。ひいては生態系に不可逆的な負荷を与えうる。」

【芹沢部会長】 移植の問題は基本的に二つある。

一つは、レッドデータブックでは移植は要求していないということ。要求しているのは生育環境の保全であり、移植は保全対策にならない。

もう一つは、移植は基本的に移入種問題を引き起すということ。もともと分布できない場所に移植すれば、本来いない状態を破壊する。愛知県環境影響評価審査会設楽ダム自然系部会会議録 平成 18 年 11 月 1 日

## 2-2 ネコギギ放流は成功するか

ネコギギだけが棲む川？の生物多様性

ネコギギ 愛知県：絶滅危惧 B 類（国：絶滅危惧 B 類）

■他の魚類についての対策は？

- ・カジカ 愛知県：絶滅危惧 類（国：大卵型-準絶滅危惧）  
対策は放流、しかし、生息条件はネコギギとは異なっている。
- ・ナガレホトケドジョウ 愛知県：絶滅危惧 類（国：絶滅危惧 B 類）  
特に対策は検討されていない。  
生息域が分断 ネコギギでは影響が指摘されている。  
東海地方では別種の可能性がある。
- ・アカザ 愛知県：準絶滅危惧（国：絶滅危惧 類）  
特に対策は検討されていない。

ネコギギの穴 空隙整備は可能か？

土砂供給がなくなり、出水による攪乱がなくなる。

河床のアーモークコート化が進む。有機物等が堆積する。

ダム建設により下流ではネコギギの棲む穴（空隙）は維持できない。

【芹沢部会長】 44 ページの最後の行に「したがって、ネコギギは利用する横穴の形成要因として、出水により更新されるという要因を考慮する必要があると示唆された」と書かれている。要するに攪乱である。愛知県環境影響評価審査会設楽ダム自然系部会会議録 平成 18 年 11 月 1 日

ギギとネコギギ 国内外来種という脅威



豊川にはギギという国内外来魚が生息している。ギギはネコギギより大型で、生息条件がよく似ている。

生息環境が競合することからギギが侵入した環

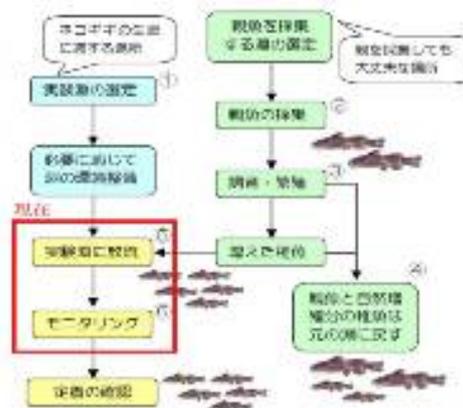
境ではネコギギの生息は適さない。

### 2-3 野外放流実験 移植という危険な賭け

#### 野外実験について

取り組みの第一歩として、「ネコギギの生息に適すると思われる場所」にネコギギを放流し、定着することができるか（世代をくり返すことができるか）を確認するという野外実験を行っています。これにより、生息場として適する場所の評価をより確実なものにしていきたいと考えています。

なお、野外実験のフローについては、右図のとおりです。



野外実験のフロー



- 豊川での実績を造ることが目的
- ・異なる環境（川）に移植した事例はない
  - 岐阜県の事例は工事に伴う一時避難 同一の川に放流している。
  - 希少種を養殖。自然の河川に放流という実験。
  - 繁殖させて放流するという「安易な」対策に陥らないか？

- 環境整備 ネコギギの生息する「川」をつくる
  - 人工水路にネコギギの生息環境をつくる実験
  - 人工水路の限界（出水がない・土砂供給がない）

人工的に造った環境で何世代、ネコギギが生存可能か？

移植は成功の可能性に疑念があり  
むしろ  
生物多様性を損なう危険性を伴っている！

環境に優しいダム？

生物多様性にとってのダム建設

<環境という視点で>

渇水の対策として環境に優しいダムが目的のはずだった。

特定の種（ネコギギ）に偏重した環境対策  
前例がないことを理由に、増殖、野外実験が行われている。  
現在は実験として文化庁からの許可を得ているが、

養殖して放流という危険な道は無いか？  
ネコギギ以外の魚類（生物）はどうか？

ネコギギの棲む川をつくる

ネコギギの棲む空隙を造ろうとしている（環境整備）  
本来の自然を保全するためには、他の生物についても環境整備が必要。  
結局、「川」を造らなければならない。

川をダムで壊し、新たに川を造るという矛盾

ネコギギの棲む川

ネコギギは本来「生物多様性」のシンボルだった

「ネコギギは、「隠れ家や繁殖場所」、「平瀬や淵」、などのほかにその周辺環境として、「きれいな流れ」、「ある程度の広さや川の連続性」、「豊富な餌（平瀬の水生昆虫）」、「豊かな河畔植生」が確保されている河川に多く生息する。

結果的にこのような場所はゲンジボタル、イシガメ、カジカガエル、アユなども生息する自然豊かな場所であり、ネコギギは美しい清流を象徴（シンボル）する魚といえる。」

「天然記念物ネコギギ保護管理指針」2005年 三重県より

リバーリバイバル研究所

岐阜県岐阜市世保

新村安雄

<http://blog.goo.ne.jp/niimuray>

ブログ「リバーリバイバル研究所」